

## ホイッグ的歴史解釈とミルトン

清滝, 仁志  
西南学院大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/16427>

---

出版情報 : 政治研究. 50, pp.159-181, 2003-03-31. 九州大学法学部政治研究室  
バージョン :  
権利関係 :

清 滝 仁 志

## はじめに

T・S・エリオットは、ジョン・ミルトンの詩作を解釈するにあたって「無意識的な党派根性」の危険を指摘し、「我々のレンズが激情の霧によって曇る」ことを懸念していた。彼は、この傾向が、「今日では異なった衣をまとっているため、危険がかなり大きい」ことを指摘している<sup>(1)</sup>。ミルトンは、イギリスの文人の中で、とくにその政治的性格を意識せざるを得ない人物である。そして、ミルトンの批評において、政治における議論を回避するアプローチは、この「激情の霧」を回避するための方法でもあった。だが、それは消極的アプローチとのそしりを免れることはできない。文人ミルトンの政治的性格をいかに理解するのか、という問題は、ミルトンの著作全体を考える中で避けて通れないものである。

ミルトンの政治思想についての理解は、十七世紀の内乱に

対する歴史解釈と連動しており、その政治思想の意義が積極的にとりあげられるようになったのは十九世紀である。彼を政治的勢力としてのピューリタン、そして革命と結びつける解釈の基礎は、主としてこの時期に形成されたといっても過言ではない。本稿では、十九世紀の著述家におけるホイッガの歴史解釈を中心にしながら、ミルトンの政治思想に対する評価の傾向を明らかにしてみたい。この試みは、十九世紀イギリスの政治的文脈の一面を明らかにすることによって、現在まで続くミルトンに対する政治の「霧」の歴史的性格を説明するものである<sup>(2)</sup>。

## 一 イギリスの「旧体制」の崩壊

イギリスの近代化において、政治面での転機は一八三〇年代であった。ジョン・クラークは、名譽革命から一八三二年の選挙法改正までのイギリスの政治社会を「旧体制」として、君主、貴族ジェントリ、国教会の密接な関係からなる「コンフェッショナル国家」と位置づける<sup>(3)</sup>。「旧体制」では、各人は独立した権利義務関係の主体というより、国教会秩序の一部分であり、その体系での位置によって政治・社会関係が規定される。「信従」、「パトロン・クライアント」は、この関

係を基礎づけている。ピューリタンの後裔であるデイセンター（とくにプロテスタント・デイセンター）は、宗教的寛容を認められていたものの、政治参加からは除外されていた。十九世紀半ば以降の改革の時代に「旧体制」は、徐々に解体し、政治・行政・社会制度の近代化がおこなわれた。この時期のイギリスは、民衆化・イデオロギー・世論・産業化の時代であり、「旧体制」にさまざまな点から異議申立てがなされた。

具体的にその改革の契機は、一八三〇年代の選挙法改正とカトリック解放、審査律廃止にみられる国教会の政治的特権の廃止である。名譽革命体制、とくに国教会を中心とした貴族ジェントリ寡頭政は崩壊し始め、デモクラシー化が進展することとなる。それにともない「旧体制」から政治的に排除されていた中産階級、そしてそれが多数を占めるデイセンターの政治的進出が始まる。この時期、展開された新しい政治原理は、「旧体制」の伝統とヒエラルキーに挑戦するものであった。とくにそれは、「旧体制」で政治的・法的に疎外されたデイセンターの知的世界と深い結びつきを持っていた。

このことは、歴史解釈においても例外でない。内乱期についての歴史解釈は、十八世紀以来、クラレンドンの『大叛乱史』とヒュームの『イングランド史』が正統的解釈として定

着していた。内乱は、伝統的国家体制からの逸脱にすぎない一つのエピソードであった。「革命」(revolution)は、本来の字義どおり、一六八八年の事件に対してのみ用いられていた。もちろん「旧体制」において共和主義的言説は存在していたが、十八世紀のカントリー派の議論にみられるように、伝統的国家体制の枠内での議論にとどまっていた。だが、十九世紀に入り、「旧体制」の崩壊のきざしが見えるにつれ、内乱期を別の見方で解釈する議論が有力になってきた。

## 二 「ホイッグ史観」の登場

イギリス史学における「ホイッグ史観」の発展は、実はこの「旧体制」崩壊と無縁でなかった。バターフィールドは、『ホイッグ史観』(The Whig Interpretation of History, 1931)において、イギリスの歴史解釈のホイッグ的特徴として、プロテスタント・自由・進歩を基本にした視点の存在を指摘している。とくに内乱解釈において、このホイッグ史観は、現在まで強く残っている。ガーディナーの唱えた「ピューリタン革命」の概念は、この典型であろう。もちろん、プロテスタント・自由・進歩を基調とする歴史解釈は、十六世紀におけるフォックスの『殉教者列伝』にみられるように、近世よ

り存在していた。だが、十九世紀以降のそれは、近代的な資料解釈と結びついた学問的な歴史解釈となっている。このホイッグ史観は、デモクラシーの発展という政治状況の背景の下で、イギリス史研究において優越的地位を占め続けることになった。<sup>(5)</sup>

十九世紀におけるホイッグ史観は、参政権権拡大運動とともにその推進勢力であるホイッグの党派的主張と結びつけられて発展した。その先導者の一人が、ジョン・ラッセル卿(Lord John Russell, 1792-1878)である。彼は、ベッドフォード公爵家出身で一八三〇年代、ホイッグ急進派の政治家の中心として、選挙法改正に活躍した。哲学者のバートランド・ラッセルの祖父にあたる人物である。

ラッセルが『イギリス政府と国家体制の歴史に関する論考』(An Essay on the History of English Government and Constitution, 1823)で展開した歴史解釈は、「ホイッグ貴族としての党派的な立場の議論である。「国王の大権」と「臣民の自由」の対立枠組の上に立ち、臣民の自由の擁護者としてのホイッグの伝統をヘンリー八世からの歴史叙述によって賛美する。十九世紀における選挙法改正、デイセンターの権利拡大という状況に際しても、自由の擁護者ホイッグは、引き続き、国民全体において指導的地位に立つという政治的前提が

ラッセルの議論にあった。

本稿との関係において、ラッセルの歴史叙述で注目すべき点は、ホイッグの政治的伝統を内乱と切り離す解釈を展開していることである。彼は、内乱期における共和主義を「聖書から引き出したほとんど間違った概念」とし、「奇怪な陶酔<sup>(6)</sup>」であると評価している。

とくに彼は、共和国成立初期において長期議会が排除された事態を批判している。イギリスにおける伝統的国家体制の中で、議会は、臣民の自由を擁護する機関であり続けてきた。この意味で、ラッセルは、「議会の運命は、国家にとって国王よりずっと重要である<sup>(7)</sup>」とまで言いきっている。伝統的議會を排除した共和国は、「すべての既存の権威が倒され、すべての政府が疑問と推測の対象になる時、自由と法を求める場所がない<sup>(8)</sup>」体制であり、評価に値しない。

ラッセルにとって、内乱は、自由発展の歴史にとって、混乱の時期であり、名誉革命こそ、イギリス人の自由を擁護してきた「古来の国家体制」の復活として積極的に評価すべきものである。ラッセルの祖先であるウィリアム・ラッセル(一六三九—一八三三)が連座したライーハウス陰謀事件(一六八三年)は、伝統的国家体制の連続性の中に位置づけられるべき、自由のための壮挙であった。十九世紀の改革は、この「古来

の国家体制」に沿った形でおこなわれるべきだとするのがラッセルの立場である。この図式の中でジョン・ミルトンの政治思想について、ほとんど積極的に評価すべき点はなく、ラッセルはミルトンについて触れてはいない。

トマス・マコーレー (Thomas Macaulay, 1800-1859) の『イングランド史』(History of England, 1841-61) は、十

九世紀において、広く読まれた歴史書であり、ヨーロッパ諸国やアメリカ、そして明治期の日本においてもその名をとどろかした。マコーレーは、この時期の代表的なホイッグ著述家である。彼が著述家として登場するきっかけとなったのは、当時のホイッグ派の評論誌である『エディンバラ・レビュー』に掲載した「ミルトン」(一八二五年)である。この論文は、ミルトンを通じて、内乱期の歴史の再解釈を卓越した筆致でおこなったものであり、マコーレーの文名を高めた。

「ミルトン」でのマコーレーの議論は、本稿での問題関心に即していうならば、次のような特徴を持っていた。すなわち、「大叛乱」を自由と専制、理性と偏見との闘争における一つのエピソードとして、その積極的意義を強調したことである。彼は、「内乱によって多くの邪悪がもたらされるが、それらは我々の自由の代償である。」と述べている。ホイッグ貴族のラッセルが「古来の国家体制」の枠内で、自由の発展を論じ

たのに対し、彼は、その枠を越え、共和国を積極的に評価する。

マコーレーは、従来、否定的に論じられてきた共和国時代の混乱を、それ以前の専制的抑圧体制に由来するものとして弁護して、次のように述べている。

「暴力が苛酷であればあるほど、革命が必要であると感じられるのである。民衆の残忍で無知な暴力は、彼らが日ごろから慣れている抑圧や低い地位にともなっている。

内乱は、そのようなものである。教会や国家の長は、自分が時いた種を刈りつつている。…もし、統治者が民衆の無知に直面することがあるならば、それは、知識の鍵を彼らから取り去っていたからである。もし、統治者が無知な憤激に攻められるならば、それは彼が、同じように無知な服従を要求していたからである」<sup>(9)</sup>

このような主張は、当時の貴族ジェントリ寡頭政を批判するホイッグ急進派の立場と連動していた。彼は、十七世紀の状況を説明しながら、同時に現在の統治者が国民に政治的自由を与えないことを批判する。国民の資質は自由によって向上するのであり、自由を与えない理由として、その資質を問

題にするのは、間違っているとす。彼は、政治的自由をみとめることによる無秩序の対処には、自由を与えるしかないとまで言い切っている。もっとも、「ミルトン」が出た一八二五年は、選挙法改正前の状況で、こうした主張は、当時のホイッグ派に受容可能な議論であった。だが、改正後の中産階級が政治進出を果たした後は、両刃の剣となってくる。世紀半ば、さらにデモクラシー化が進展した段階の中で、マコーレー自身、このような勇ましい急進的議論を出さなくなっていた。

マコーレーの議論の中心は、既存体制の転覆を正当化することではなく、その後にもたらされたイギリスの発展を賞賛することである。彼は、クロムウェルの護国卿体制を、かつてない宗教的寛容がもたらされ、イギリスの対外的発展をもたらしたとして、高く評価している。彼の描いた共和国における自由と国力の発展は、当時の大英帝国の状況と重ね合わせ読者に受け取られた。かつての共和国は、理想化されて国民の前に表れ、イギリス発展のモデルとされる。彼は、自由の発展史の中でクロムウェルを評価し、後にカーライルが描いたロマン主義なクロムウェル像につながる評価をおこなっている。マコーレーは、クロムウェルを「男らしく頑強この上ない精神を備え」、「知性は健全であり」、「中産階級の

最良の特質」、「高貴で勇敢なイギリス人魂」を持つ人物として称揚している。だが、クロムウェルの統治について、イギリスの国家体制史上、例外的なものとして、彼は理解している。「イングリランド史」で次のように論じている。

「クロムウェルの存命中、その権力は微動だにせず、彼の臣民 (subject) には、嫌悪と賞賛と恐怖の念が入り混じっていた。実際、クロムウェルの政府を好んだ者はほとんどいなかった。最も彼を憎悪していた者でさえ、その憎悪は、彼への恐怖心に及ばなかった」<sup>11)</sup>

このような両義的評価は、ピューリタンに対してもみられる。自由のための闘争を推進した勢力として、彼らを「野卑な狂信者でなく、勇敢・賢明・正直で役に立つ集団」としながらも、「陰気な生活習慣」を持ち、「不寛容かつ極端に禁欲であり、邪悪な制度をもたらす」者とする従来のピューリタン像を肯定している<sup>12)</sup>。彼が展開するホイッグ史観は、読者が受け取るほど、ピューリタンを賛美しているわけではなかった。後に書かれた『イングリランド史』では、ピューリタンに対する否定的評価を強め、彼らは、ハイチャーチのウィリアム・ロード大主教と同様、狭量かつ干渉的であり、権力を握

ると恐怖と憎悪、王政復古後には輕蔑の対象となつたと断定している。

マコーレーは、ミルトンをピューリタンと位置づけなかつた。彼は、当時のピューリタン、自由思想家、王党派の「各党派が持つ高貴な資質を調和させて結びつけている」存在としてミルトンを考えている。ピューリタンにおける高貴な資質に加え、古典文献の学識を持ち、国家を偶像視して、プルトルコスの英雄を自負する自由思想家、深遠で洗練され、徳、礼儀、鷹揚さ、誠実さなどですぐれている王党派の美点を、ミルトンは持つていた。マコーレーによれば、「ミルトンの意見は民主的であるが、その趣向や交友は、貴族政や君主政に合つて<sup>14</sup>いる」とする。当時の人物の中で、ミルトンは、一頭抜いた存在であつた。チャールズの政策に反対をとへた者が多いが、ミルトンのように「道德的・知的隷属がもたらす悪を理解でき、出版の自由と私的自由がもたらす利益を理解しているものはない<sup>15</sup>」とマコーレーは絶賛する。彼が描いているミルトンは、ホイッグの英雄であつた。彼は、混乱する状況の中で、高邁な精神を持ち、自由の大義にしたがう、時代を越えた傑物であつた。

マコーレーは、政治家として、ホイッグ貴族のパトロネジの影響にあり、その歴史解釈は、党派としてのホイッグに密

接に結びついていた。ミルトンも党派的ホイッグの枠組の中で評価される。彼のホイッグに対する評価を歴史家トレヴァー・ローパーは、次のように評している。

「過去においてイギリスのホイッグは：イギリスの共和主義者、レヴェラーズ、フランスのジャコバンよりも成功をおさめている。現在と予見可能な未来において、彼らは、イギリスの功利主義者、フランスの社会主義者、アメリカの民主主義者よりも成功を収めているのである。これが歴史の教訓である<sup>16</sup>」。

マコーレーは、「古来の国家体制」を維持させようとするラッセルよりも急進的であつたが、伝統的国家体制を維持する立場から逸脱することはなかつた。「ミルトン」において、共和国を高く評価していたマコーレーであるが、『イングランド史』になるとその評価の比重を名譽革命体制に移していくことになる。マコーレーがめざしたのは、「旧体制」としての名譽革命をよりホイッグ的に再解釈し、同時代のデモクラシイ的改革に適合させることであつた。彼にとつて、名譽革命は、「法の権威と財産の保障」「討論の自由と個人の行動の自由」がかつてないほどうまく調和した体制であり、「人類の年代記

にも前例のない繁栄」がもたらされた。名譽革命体制における一六〇年間、イギリスの歴史は、「物質的にも、道德的にも、知識の上でもきわだつた進歩の歴史」であつた。共和国は、この名譽革命体制確立のための通過点であつた。

マコーレーは、同時代における改革の主導権をホイッグの手に残すことをめざし、体制の抜本的改革をめざすディセンターおよび功利主義者の急進的主張を批判する。彼は『イングランド史』でピューリタンの偏狭で、專制的な態度を批判し、ベンサム派のジェイムズ・ミルとイギリス国制について論争を繰り広げていた。マコーレー自身の「保守主義者とは、以前のホイッグである」という有名なことばにあるように、世紀半ばには、マコーレーの歴史解釈の持つ保守的性格は、ホイッグを越えて受容される傾向にあつた。

当時、党派的ホイッグ史観以外に、厳密な歴史学的手法を用いながらも、自由の發展の進歩史観に立つた著述家が存在した。それは、イギリスだけでなく、ヨーロッパ全体の傾向であつた。とくに、フランソワ・ギゾー (François Guizot, 1787-1874) は、イギリス政治に大いなる関心を抱き、これについて、緻密な分析を展開することによって、イギリスにおける歴史学の確立に多大な影響をもたらしていた。<sup>(17)</sup> 彼の歴史叙述は、イギリスにおけるホイッグ史観と必ずしも同一視す

ることはできないが、プロテスタント・自由・進歩を中核とする点において共通している。<sup>(18)</sup>

ギゾーは、七月王政の金融ブルジョワ体制を主導した政治家(首相に就任)としても知られるが、『ヨーロッパ文明史』(二二八年)を代表作とする歴史家である。『アメリカのデモクラシー』の著者アレクシス・トクヴィルは、彼の文明史講義を聴いて、大いに感銘を受けている。ギゾーは、フランスでは、少数派のユグノーとして、プロテスタント的な宗教的自由に理解を持っていた。彼は、イギリス政治における自由の發展の経過に関心を持ち、一八二六年に『イギリス革命史』(*Histoire de la Révolution D'Angleterre*)を出している。内乱を「イギリス革命」と称するのは、R・C・リチャードソンによれば、彼をもって嚆矢とする。<sup>(19)</sup> このことは、従来、イギリスで通用していた「革命」の字義を發展させて、フランス革命と同様な政治的意味付けを持つことになった。

ギゾーは、イギリス革命を文明の發展の原動力としての自由の探求 (*le libre examen*) がもたらした事件としている。それは、フランス大革命との連続性を持つものであつた。この革命は、国民が宗教と政治上の自由を求めらる中で起こつたものであり、世俗および精神世界の專制的権力との闘争であつた。中心は政治的闘争であつて、教義や信仰をめぐつて

の宗教闘争でなかった。<sup>(20)</sup>

ギゾーは、この革命に際して、三つの党派を挙げ、そのうちの一つにミルトンを分類している。一つは、合法的改革 (Reform légale) 派であり、伝統的国家体制にもとづいて、専制的となった当時の王権に制限を加える立場である。代表的人物が『大叛乱史』の著者クラレンドンである。次に、政治革命 (Révolution politique) 派である。この立場は、国家体制における庶民院の政治的優越を求め、庶民院主権を主張する勢力である。この党派の宗教的部分が長老派である。第三の立場が共和主義 (Republican) 派であり、政治の基礎と制度の変更を求めている。彼らは「イギリスの過去と絶縁し、その制度と国民的記憶は放棄して、純粹な理論にしたがって新しい統治を実現する」ことを要求する。その政治的部分には、共和主義の理論家であるラドロウ、ハリントン、ミルトンが含まれ、宗教的部分に、聖者の支配を要求する熱狂主義的セクトが分類される。革命の権力闘争において、この三党派は、ともに政治的支配権を確立できず、政治的混乱を招いた。<sup>(21)</sup>

「状況と利害からの共和主義者」であるクロムウェルは、このような混乱状態を收拾することで権力を得た。彼は、フランス大革命における「ダントンでありボナパルトである人物」

であり、革命のあらゆる場面に登場する。彼は、叛乱の主導者であり、秩序の回復者であった。彼が他の党派に比べてすぐれていたのは、統治能力をもつ政治家としてであった。だが、人心を支配しておらず、一時の必要悪として受け取られていた。<sup>(22)</sup>

このようなギゾーの図式の中で、ミルトンはすぐれた著述家であり、自由を雄弁に主張する「真の共和主義者」として扱われている。ギゾーはミルトンを革命の最終段階においてさえ、共和主義擁護の論陣を張るミルトンを紹介している。だが、他方で「空想的理念、利害擁護の詭弁、職務上の立場を自由の原理の名によって、専制に結びつけている」とシニカルに扱っている。<sup>(23)</sup>

ギゾーの研究は、同時代のイギリスのホイッグ史観に比べて、より分析的であり、学問的である。だが、彼は、フランス大革命のアナロジで、イギリス革命における政治状況を解釈していることが推測される。彼の掲げた三つの党派は、それぞれ王党派、ジロンド派、ジャコバン派に重ねあわせることが可能であろう。彼は、宗教的勢力の革命に対する貢献を評価しながら、その視点の中心を、世俗的闘争に向ける。フランスとイギリスにおける宗教の位置づけの相違を認めながらも、彼が、信仰を革命の焦点から除外したのは、イギリ

ス人歴史家との大きな相違である。政治的伝統と切り離された共和主義的議論を当時の状況において積極的に評価したのは、フランス人歴史家ギゾーの功績であろう。

ギゾーによるミルトンの解釈として注目されるのは、彼を政治的な共和主義者として理解し、宗教的勢力と区分し、しかも、機会主義に立つクロムウエルの立場と明確に区別していることであった。だが、ギゾーが指摘したイギリスの共和主義は、内乱解釈において注目されたとはいいがたい。それは、共和主義が政治勢力として現存するフランスと、そうでないイギリスの政治状況の相違によるものが大きいであろう。十九世紀のイギリスでは、むしろ、次のガーディナーのように宗教を強調する解釈が重要視されたといえる。

### 三 ホイッグ史観と「ピューリタン革命」

ガーディナー (S. R. Gardiner, 1829-1902) は、イギリスにおけるアカデミックな歴史家として、この当時、量的にも質的にも最大の貢献をなし、知的影響力を持った人物である。<sup>(23)</sup> それは、彼によってもたらされた「ピューリタン革命」という用語が、現在まで残っていることに端的に表れている。ガーディナーは、詳細な叙述において、内乱が宗教をめぐる闘争

から発生したことを論証している。その闘争の担い手が宗教的、政治的専制に対し、自由を要求したピューリタンである。彼によれば、「ピューリタニズムは、チャールズに抵抗する力を形成したばかりでなく、イングランド自体の力をもつくりあげた」のであり、「議会の自由、さらに議会による支配も、獲得するために戦う価値のあるものであった」とされる。<sup>(24)</sup> この革命は、階級の闘争でなく、宗教を軸とした政治的対立関係があることで、フランス大革命と異なっているという。

ガーディナーは、綿密な資料調査にもとづいて、愚直ともいえるほど年代順の叙述に徹することで、党派のホイッグ史観と一線を画した。だが、彼の描くクロムウエル像は、カーライル<sup>(26)</sup>に、ロマン主義的な英雄であることを強調している。ガーディナーは、評伝の中で、クロムウエルについて、「彼のめざすのは、第一に誠実な人物であることであり、第二に、神と神の国民に仕えることであり、第三に、共和国への義務を果たすことである」とし、彼の「動機の高貴性」、「強靱な性質」、「幅広い知的能力」を賞賛している。党派のホイッグ歴史家がクロムウエルの専制政治について抱いた政治的違和感<sup>(27)</sup>は、ガーディナーにおいて、ピューリタニズムの大義に覆い隠されているとさえいえる。

このことは、ミルトンの叙述にも表れている。ミルトンの

評価は、クロムウェル支持者としての評価であり、彼の持つ高邁な精神は、クロムウェルの専制政治における精神卓越性を擁護するのに用いられている傾向がある。ミルトンは「イギリス人に対して党派感情を捨て、思想と行動の自由のために戦うことに邁進している偉大な指導者の規範にしたがう」ことを求めている。<sup>(28)</sup>さらに「国民 (people) が邪悪に傾くならば、政府はより高貴な生活にふさわしい教育をおこなう」義務があるとミルトンは論じ、「善良で賢明な者だけが世界の重荷を負うにふさわしい」という「政治的ピューリタンの最高の教え」<sup>(30)</sup>を展開している。ガーディナーにおけるミルトンの叙述の多くは、デイビッド・マッソン (David Masson) のミルトンの伝記に依拠しており、広範な著作であるのにもかかわらず、ミルトンの政治的位置づけについて、彼独自の言及は少ない。

ガーディナーは、「ピューリタン革命」という概念によって、内乱を宗教改革からの連続性を持つ宗教的自由の進歩の歴史に位置づける。その自由は、伝統的国家体制における臣民の自由と異なり、普遍的なものであり、十九世紀におけるデモクラシー改革に通じるものである。また彼が、党派的ホイッグ歴史家と異なり、ピューリタンの役割を積極的に理解する背景には、当時のデイセンターの政治的立場と切り離すこと

ができないであろう。十九世紀の半ばになると、開明貴族を中心としたホイッグが、より多様な勢力を含めた自由党に変化する過程の中で、デイセンターの政治的発言権も向上していた。<sup>(31)</sup>ガーディナーにおいて描かれるピューリタンとは、国教会権力に対抗する分離派であり、それは同時代のデイセンターに重ね合わせる事ができる。それは、イギリスの歴史家が知っているピューリタニズムとは、同時代のデイセンターに他ならないとのクリストファー・ヒルとのことばを裏づけるものであった。十七世紀のピューリタンと十九世紀のデイセンターは、歴史的にも教義においても連続性はないのであるが、両者を結びつける解釈がこの時期から定着していくようになる。<sup>(32)</sup>

このような立場において、ミルトンは、クロムウェルおよびピューリタンとの関連で評価される。ピューリタン、クロムウェル、ミルトンの政治的・宗教的立場が不分明になり、ミルトンの政治思想を論じるのに、後二者との関係を出発点にする思考方法は、ガーディナー以降といっても過言ではない。また、ミルトンが「リルバーンの私的自由の主張に多分、かなり親近感を持っていた」<sup>(33)</sup>とするレヴェラーズとの関連との示唆は、革命の急進主義的部分に目を向けた後世の解釈との接点を設定したということでは評価されるのではないか。

以上みてきたホイッグ史観は、次第に同時代の多くの知識人の歴史理解の前提となつていった。T・H・グリーン(Thomas Hill Green, 1836-1882)は、オックスフォード理想主義の代表的人物であり、その主要著書『政治的義務の原理』(Principles of Political Obligation, 1895)は、イギリス自由主義の集産主義的展開に多大な知的影響を發揮したと評價される。彼は、政治において、自由党支持であり、コブデン、ブライトに好意的であつた。

グリーンは、一八六六年に内乱期の共和主義について講演をおこない、『イギリス革命についての四つの講義』(Four Lectures on the English Revolution)として出版した。オックスフォードにおける伝統的な知的世界にとどまり、政治活動よりも学究を重視した人物として「イギリス革命」という表題は意外であるが、彼は、ホイッグ史観の立場にあつて議論を展開していた。

グリーンは、十七世紀における共和主義を宗教改革以来の改革の衝動がもたらした結果して位置づける。外面的儀式から自由であろうとする改革者の運動がイギリス革命という形で最終的に展開したとする。彼は、その革命において、内面的自由の議論を重視し、いささかフアナティックな人物としてとらえられることの多い人物であるサー・ヘンリー・ヴェー

ンを時代に先駆けた自由の擁護者として絶賛する。彼が、ヴェーンを代表とするピューリタン、そしてその後身のデイスンターに、自由の擁護者としての歴史的地位を与えていたことは、次の記述で明確である。

「クロムウェルの剣をもつて、分派的教会のために獲得した十五年の間の旺盛な発展は、いかなる反動をもつても抑圧できない、イギリスにおける政治生活の偉大な源泉となる永遠の力をその教会のために与えた。だが、クロムウェルとヴェーンの中に息づいた高邁な情熱は、単にピューリタンやイギリスに限られるものではなかつた。それは：現世の物質的な利益とたえず対立を続ける普遍的精神力というべきものである。：ヴェーンが断頭台の上で言つた。「死とは小さな言葉である。しかし死ぬことは、偉大な仕事である」と。かくして彼自身の情熱は、それが再び起きるために死んだ。その情熱は、感覚の弱き時期に蒔かれてしまつたが、力強く、それが知的に理解される中で再興されるものであつた。」<sup>(34)</sup>

グリーンは、ヴェーンが訴えた理想の現代的展開として、自身の理想主義哲学を位置づけている。

ヴェーンに対する高い評価に比べて、グリーンンのミルトンに対する政治的評価については厳しい。ミルトンの主張は「デモスなしのデモクラシー」として、その貴族的性格を手厳しく批判される<sup>(35)</sup>。ミルトンが、理性にもとづく統治を主張しながら、一般民衆を除外したことを、少数の理性によつて多数の感情を抑圧するものであるとグリーンンは評価している。当時、共和国の永続のためには、何よりも支持基盤を広げ、国民全体の広範な支持を求めることが重要であったが、ミルトンは、軍事的勝利に酔いしれたランブ議会の党派的主張を正統化し、共和国が永続する可能性を奪つたとして批判される。

グリーンンは、ミルトンの反デモクラシー的主張を問題視している。デモクラシーの進展の中で、ピューリタン、クロムウェルの政治議論の中に、ミルトンの政治思想が埋没していく現象がグリーンンにおいてみられている。

十九世紀においてホイッグ史観が発展した背景には、第一に冒頭で述べたように「旧体制」が崩壊し、デモクラシー化が進展しつつある政治情勢があつた。それは、ホイッグ史観を当初先導したのが、選挙権拡大に積極的なホイッグ政治家であつたことに象徴的である。だが、やがてこの解釈は、世紀の進展とともに急進化していくことになる。急進化における二つのチームがピューリタンとデモクラシーである。当初、

ホイッグ史観において、ピューリタンは、必ずしも積極的に評価されていなかったが、デイセンターの政治的地位の上昇とともに評価が上がっていく。グリーンンにみられるように、十七世紀ピューリタンの主張する政治的・宗教的自由は、十九世紀の自由主義的主張の先駆をなしたとする理解が広がっていた。以降、十七世紀の政治思想において、ピューリタニズムの意義を強調する論者は、解釈者の時代の政治議論をそこに読みこむ傾向があつた。ジョージは、二十世紀のピューリタン研究者の中で、A・D・リンゼイ、R・B・ペリー、A・S・P・ウッドハウス、W・ハラーの名を挙げ、彼らがピューリタンの敬虔な素材を、平等主義、個人的自由、寛容に変える錬金術を施したと評価している。さらに、彼は、ピューリタニズムにレーニン主義的革命理念を読みこんだM・ウォルツァーの非歴史的分析を批判している<sup>(36)</sup>。歴史的研究というより思考上の連想に近いウォルツァーの議論はともかく、ピューリタンということばは、少なくとも十七世紀に關しては、歴史的分析概念として用いるのが困難となるほどに多様なものとなつた。現在の十七世紀研究において、ミルトンがピューリタンかどうかは、政治的にはほとんど意味のない問いかけとなつてしまつている。

また、ホイッグ史観は、次第にデモクラティックになつて

いった。とくにガーディナーにおいて明確であるが、彼は、十七世紀の段階で、すでに政治的意識に目覚めた国民 (Peo-ple) を見出し、政治的自由の闘争の主体として扱っている。

それは、歴史的事実と言うより、十九世紀半ば、デモクラシーが進展した状況での一般国民の姿に重ね合わせたものという方が適当でないか。このような観点は、二十世紀におけるトレヴェリアンなどの研究者にも共通して見られることになる。十七世紀のパトニー討論は、二〇〇年後のチャーティストと結びつけられ、デモクラシーの系譜が導かれてくる。そもそも長い間、忘れられていたパトニーの野での議論に歴史的に光をもたらしただのが、ガーディナーに学問的に多くを負うチャールズ・ファース (C. Faith) であった。<sup>37)</sup> ホイッグ史観によつて、十七世紀の政治闘争は、十九世紀のデモクラシー化における政治闘争を反映して描かれる。同様な現象がピューリタン研究の二度目のピークの第二次世界大戦前後にもみられるのである。

ホイッグ史観が発展した第二の要素として、この時期において自由主義イデオロギーが国際的に発展したこととの関連も指摘されねばならない。党派を示す「リベラル」ということばが、十九世紀のスペイン共和政に由来するように、同世紀において自由主義イデオロギーは、ヨーロッパ政治の重要

な動因であった。ギゾーが文明史に見出した自由の探求とは、その状況を端的に把握したのものとして評価できるであろう。

当時の政治闘争は、イタリア統一運動、バルカン半島諸国の独立運動にみられるように、自由のスローガンの下におこなわれ、そのことで大衆動員や国際協力が可能となつていった。とくに当時の覇権国であるイギリスにとつて、自由とは、自国の対外進出を正当化するタームであった。このイデオロギーを後押しするのが、イギリスにおける自由と大陸における専制という伝統的な対立概念である。この国際的な自由は、国内において、貴族ジェントリ寡頭政に対して自由を主張する急進主義者によつて唱えられていた。<sup>38)</sup> ホイッグ史観で描かれる共和国の自由と対外発展は、このような政治状況において世論に評価されることとなる。<sup>39)</sup>

ただ、イギリスにおける自由主義イデオロギーは、宗教と結びついていた点で、大陸におけるそれと異なっている。エドモンド・バークの著作にみられるように、フランス大革命における宗教否定の経験は、イギリス人にとつて受け入れがたいものであった。ギゾーの共和主義研究は、共和国の党派分類など卓越した視点を提供したが、宗教に重点を置かない分析ゆえに、ホイッグ史観の中心となり得なかつたのではないか。<sup>40)</sup> 内乱に関するホイッグ史観では、世俗的共和主義に重

きを置いておらず、共和主義は、後にホイッグ史観批判の中  
で注目されるようになる。

#### 四 文人ミルトンと政治性

このようなホイッグ史観に対し、十九世紀における伝統主  
義的な政治的立場において、内乱は、依然として混乱と無秩  
序の時代であり続けた。そこでは、イギリスの伝統的國家体  
制の連続性とその価値を重視する<sup>(41)</sup>。共和国のイデオログで  
あるミルトンの政治的議論は、相変わらず、消極的に評価さ  
れるべきものであった。文人ミルトンを非政治的に理解しよ  
うとする立場は、ここから生まれている。

詩人マシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-1888)  
は、社会評論家としても知られ、『教養と無秩序』(Culture  
and Anarchy, 1867-9) で指摘した「野蛮人」「俗物」「大衆」  
は、イギリスの階級社会の卓越した描写として知られる。そ  
の指摘は、デモクラシーが進展しつつある社会における国民  
の精神性に対する彼の懸念の表れであった。それは、彼が俗  
物 (philistines) と評した中産階級の精神が、デモクラシー社  
会において優越的地位を占めることである。彼が中産階級に  
おいて最も懸念したのは、物質主義とセクト主義であり、そ

の主導者である功利主義者とデイセンターを批判していた。  
マシューが一八八八年にセント・マーガレット教会(ウェ  
ストミンスター聖堂の隣りにあるミルトンが結婚式を挙げた  
教会)で講演したものをまとめた小論「ミルトン」において、  
その持論は、いささか極端な形で強調される<sup>(43)</sup>。

この講演で、マシューがミルトンの偉大さを強調する中で  
指摘したのは、同時代における「アングロ・サクソンの悪影  
響 (Anglo-Saxon contagion)」である。彼は、この悪影響を  
次のように論じている。

「アングロ・サクソン民族は、常に最も数が多く、かつ最  
も急速に増加している。彼らの物質への関心は、たえずか  
きたてられ、精神的に追求されている。理念、それが持つ  
高貴で希少な理念は、衰退し、喪失する危機にある。」<sup>(44)</sup>

彼が最も懸念するのは、アングロ・サクソンにおける「平均  
人 (average man)」の脅威である。「普通の間人であること  
が理想であり、その普通の行動が多分に評価され、欠点が過  
度に見逃されている」<sup>(45)</sup>傾向が現在高まっているという。

マシューのこの発言の背景にあるのは、デモクラシーの進  
展によって、イギリス社会がアメリカ化することの懸念であ

る。彼は、アメリカ・デモクラシーをイギリスのデモクラシー化に際しての悪しき見本と考えており、「俗物」における物質主義とセクト主義の温床と考えている。そのアメリカをマシューは一八八三年に訪問し、興味を持つものがない、平凡な者が支配する社会という印象を受けている。彼は、ミルトンをアメリカにおける平凡な「俗物」支配に対抗する存在としてみている。ミルトンは、イギリスの高貴な理念の象徴であり、次のように賞賛されている。

「もし高邁で完全な卓越性を尊敬する訓練が、とくに我々イギリス国民に必要であるとすれば、わが国のあらゆる天才の中で、ミルトンこそ、最良の教訓を与え、有益な影響をもたらすのである。<sup>(46)</sup>」

このようにイギリスの高貴性を代表する文人ミルトンは、不寛容と偏狭の悪徳に染まるディセンターとは異なっている。マシューがミルトンのピューリタンの性格を過小評価することに つとめているのは、『教養と無秩序』における次の記述からも明らかである。

「イギリスのピューリタンとプロテスタント・ディセン

ターに属していて多くの成果をもたらした人々は、国教会の内で訓練された者である。ミルトン、バクスター、ウエスレーがそうである。一世代か二世代、国教会の外にいとピューリタンはもはや国民的に著名な人物をつくりださない。<sup>(47)</sup>」

また一八七七年にマコーレーの「ミルトン」についての評論「ミルトンについてのあるフランス人の批評」で、マシューは、ピューリタンとミルトンを結びつきをマコーレーに見出そうとする読者を次のように批判している。

「ピューリタンの大義、ピューリタニズムの栄光の一人としてのミルトンについて、熱意溢れて「マコーレーの」「ミルトン」論を読もうとする者がずいぶん多い。こういう読者が強く望んでいるのは、すでに自分達の随喜渴仰の対象となつている大義や人物が、力強く賞賛されることである。マコーレーはたしかに、こういう人々の望みを満足させるであろう。彼らは、内乱をへ善 (Ornastes) と悪 (Arinanes) 自由と専制、理性と偏見の偉大なる衝突であることを知る。彼らは、偉大なピューリタン詩人が、その仕えた

嚴肅な大義に値すると聞かされるであらう。<sup>(48)</sup>

この批判は、数十年前に書かれたマコーレーの叙述の批判として正確でなく、むしろ、当時のホイッグ史観にもとづくミルトン像の批判であるといえるのではないか。マシューは、この善悪二分論が同時代の政治論争と連関していることを十分意識しており、偉大な国民的詩人をこの闘争とくんにディセンターの英雄として扱われることに結びつけることの不当性を訴えるのであった。ミルトンは、偏狭なディセンターの価値観から超越したイギリスの国民的教養の象徴であるべきであった。

しかし、ミルトンの高邁な精神を称揚するマシューであったが、彼は、ミルトンの散文著作での主張を評価していない。「ミルトンの論争書は、偉大な思想や美しいことが随所にみられるが、それが中心ではない」のであり、「彼の散文論文の大部分をへお粗末な議論 (miserable discussion) と<sup>(49)</sup>いうのは、まさに当を得た正しいことば」とする。彼の散文は、議論全体として積極的に評価する内容はないのであって、ミルトンの高い評価は、詩作でおこなうべきなのである。マシューにとって、ミルトンの政治的議論は、三〇〇年前の歴史の遺物でしかなかった。

マシューと同様、ミルトンの政治的著作を否定的にとらえたのは、ウォルター・バジヨット (Walter Bagehot, 1826-1877) である。彼は、現在まで続く『エコノミスト』(Economicist) の編集長として『イギリスにおける国家構造』(English Constitution, 1867)、『ロンバート街』(Lombard Street, 1873) などの卓越した政治・経済の評論活動を展開していた。彼は、自由党支持者であり、伝統的國家体制を中産階級が主導する統治に適応させることを議論している。『イギリスにおける國家構造』においては、國家の機能を「威嚴的部分」と「実践的部分」に分け、後者の部分をビジネスの資質を持つ中産階級に委ねることを主張している。その政治的立場は、マシューに比べるとはるかに自由主義的である。

バジヨットは、一八五九年に「ジョン・ミルトン」と題する評論を『ナショナル・レビュー』に展開している。この小論は、マッソンによるミルトンの伝記の批評という位置づけである。バジヨットは、ミルトンにおける政治的主張をほとんど評価していない。「度を越えた党派的精神」と「徹底した孤立」<sup>(50)</sup> というのが、ミルトンの政治活動に対するバジヨットの全体的評価である。「孤立した精神は、民衆の感情とともに働く時、大部分、その感情を大げさに誇張する」。それは「精神を孤立させる感情の必然的結果である」。「チャールズ一世

と議会との闘争が始まると、彼は民衆の運動に強い共感を示し、奇妙で極端な党派と思われる立場に進んでいった<sup>(51)</sup>と評する。「ミルトンの政治作品の理論的部分は、ほとんど歴史上のものにすぎない」とし、「一八五一年当時、フランスで憲法が論議されたのと同様に、国制について語られた議論の一つに過ぎない」「当時、政府の基礎について開かれた議論があった<sup>(53)</sup>」ゆえの産物とし、現実的意義をほとんど認めていない。ミルトンは、政治における日々の実務―それこそ政治活動の中心とバジヨットは評価する―を軽視しており、そのことは現実政治を理解していないことの表れであった。

ホイッグ史観に立たない論者にとって、冒頭のエリオットのことばにみられるように、ミルトンの政治的著作は、文人ミルトンを理解する上で、夾雑物になりかねないものとして取り扱われた。ただ、この時期に、ミルトンの政治的主張を彼の同時代の問題関心の表れとして、内面精神から理解しようとする論者が存在していた。

マーク・パティソン (Mark Pattison, 1813-1884) は、オックスフォード・リンカン・コレッジの寮長を務めた人物であり、大学改革に熱心な人物であった。マシュー・アーノルドとともに政府の委嘱を受け、大陸諸国の学校視察に出かけている。彼は、大学において古典教養の教育を重視する立場に

あり、同時代の政治とは一線を画していた。<sup>(54)</sup>

パティソンは、一八六〇年に評伝「ジョン・ミルトン」を執筆しており、それは、彼の文芸評論の中で最も評価されている作品の一つである。彼がミルトンの政治活動で最も問題視したのは、党派の変遷であり、とくに、クロムウェルの専制を擁護した政治姿勢である。

パティソンは、一六五〇年代前半、新しくできた共和国がデモクラシーに向かうのか、寡頭政に向かうのか、それとも、単独者、つまり、クロムウェル支配に向かうのかという選択の状況において、ミルトンがクロムウェル支配を支持した事情について、詳しく自説を展開している。一言で言うならば、それは「状況にもとづく政治的必然性」であり、平等のために自由を見失った空想的共和主義（ヴェーン、オバートン、ブラッドショウ）とレヴェラーズ、第五王国の熱狂主義の双方を回避する手段として、最善の選択であったとする<sup>(55)</sup>。クロムウェル支持は、破壊的混乱状況と王党派の反動の中で、自由を維持するための政治的選択であった。

パティソンによれば、ミルトンにとって所属する党派は問題でなかった。彼が重要視していたのは、自由、とくに宗教的自由の原理であり、それにもとづき、党派を遍歴した<sup>(56)</sup>。パティソンは、ミルトンにとって、礼拝儀式・統治形態は手段

にすぎず、現実が求めれば変更可能であると。彼は革命状況における党派の変遷の末に、国家教会に関する立場を除いて、クロムウェル支持に到達したとする。

パティソンは、ミルトンの散文を評するのに、「ピューリタニズム」、「共和主義」は彼の心情を表現するのに十分でないとする。パティソンは、「自由への愛」<sup>(57)</sup>とするのがふさわしいとする。ミルトンの政治パンフレットは、その理想を展開しているものであり、主張の政治的性格を細かく吟味する性格のものではない。彼は、ミルトンの散文著作を次のように評している。

「ミルトンのパンフレットは、十分な思索や哲学、学識にもとづいたものでなく、事実に対するしつかりした推論をおこなった作品ではない。それは時局的な感情に向けられた煽動的な訴えである。」<sup>(58)</sup>

パティソンは、ミルトンと同時代の人物であるジョン・セルデンのいう「ミルトンは」あらゆるものに関する自由を論じている」ということを引用しながら、彼の「パンフレットが、すべてが自由の側に立つて書かれている」ことを主張し、「主教に対し、宗教的自由を擁護し、国王に対して政治的自

由を、検閲に対し、出版の自由を、長老派に対し、良心の自由を主張する」ことを指摘している。<sup>(59)</sup>パティソンは、その議論を同時代の政治状況と切り離して、自由に関する一般議論として考察すべきとする。

パティソンがミルトンの政治的著作をその作品全体の解釈において、従属的なものとして評価しているのは、一八八五年に書かれた彼の『回想録』(Memoirs)の次の記述で明らかであろう。

「……ミルトンは二十年以上も騒々しいパンフレット論争と評議会秘書官の厄介な任務にかかずらつてきた。たしかにミルトンは、ある時期、自分で党派の情念に夢中になつていた。彼は、サルマシウスを不愉快な罵倒で責めたてたことで、視力を失つたことを自慢していた。しかし、『楽園の喪失』を生み出した神感の中で、再び、ゲーテの次のような考えにたどりつくのである。つまり、純粹に詩的な対象は、政治的なものよりもすぐれており、純粹で永遠である自然の真理は、党派精神よりもすぐれていることを。」<sup>(60)</sup>

パティソンの解釈は、ミルトンの政治的著作の持つ意味を同時代の政治的闘争と切り離し、その自由の主張を普遍的な

ものと評価することによって、詩作中心の解釈体系の中に組み入れるようと試みた。パティソンの評伝で特筆すべきは、ミルトンの主観的立場を重視し、同時代の政治状況の中でミルトンがいかに存在したかでなく、彼がいかに政治状況を判断していたかを眺める視点を提供したことである。この視点がエリオットのいう「激情の霧」を回避するための一つの有効な手段ではなからうか。

## おわりに

以上の考察から明らかなのは、ミルトンの政治的著作を評価するにあたって、同時代の歴史解釈との関連を常に念頭におく必要があることである。ホイッグ史観は、歴史における進歩を見出す作業の中で、次第に急進化する傾向にあった。それは、現在の政治状況から過去を判断する性格を持つ史観であるがゆえに、デモクラシー化が進展するにつれ、その見出す対象もその政治状況に合わせていくことになる。当初は、寡頭政を緩和しようとするホイッグ貴族に近い立場から、よりデモクラティックな立場へと変遷する。その結果、ピュートルタンは、同時代のデイセンターにおける政治闘争と重ね合わされ、その進歩的性格が強調される。そこには十九世紀後

半の政治状況が反映している。十七世紀は、十九世紀の政治闘争の鏡であった。ピュートルタンの政治的抵抗は、十九世紀にまで連続することになった。デモクラシー化が進展するにつれ、十七世紀において、よりデモクラティックな政治要素が探求されることとなる。<sup>61)</sup>

ミルトンの政治思想にみられる貴族ジェントリの知的世界との共通性とアリストクラティックな政治観は、ホイッグ史観の急進化につれ、その主張を積極的に評価することを難しくする。ホイッグ史観に立つた解釈は、ミルトンにピュートルタンーそれは十九世紀のデイセンターの描かれている一、デモクラシー的要素を読み出す作業になっていく傾向を持ち、その独自の政治思想の意義は、過小評価されることになる。

他方で伝統主義的な政治的立場の者においては、ミルトンの唱える共和主義を積極的に評価しない。この場合、同時代の政治状況と切り離し、その精神の高貴性を賞賛するか、彼の主張する自由を普遍概念として評価する道をとることにはのではないか。そのアプローチは、多かれ少なかれ、ミルトンの政治思想を同時代の政治状況から孤立したものととして扱うことになる。

近年、内乱期における共和主義的議論が注目されている状

況で、ミルトンにおける孤立性は、イギリスの共和主義の多面的性格をあらわすものとして評価の対象となりつつある。「シヴィック・ヒューマニズム」の枠組では理解することのできない共和主義論者ミルトンである。スキナーがミルトンの唱える自由のレトリックに近年、関心を持っているのは、その表れであろう。<sup>(62)</sup>ピューリタン、デモクラシーの呪縛から解放されつつある現在、ミルトンの政治思想の位置を正當に評価することが可能となっているのではなからうか。

(本稿は、二〇〇二年一月一九日、日本ミルトン・センター二〇〇二年度研究大会での報告を加筆・修正したものである)。

### 注

- (1) 「ミルトンII」(一九四七年)『エリオット全集 4』(中央公論社、一九六〇年)六九三―六九四頁。
- (2) 政治思想家ミルトンに対する一つの解釈として、次の拙稿を参照。  
「政治思想家としてのミルトン」十七世紀英文学会編『十七世紀英文学のポリティックス』(金星堂、一九九九年)九七―一六頁。
- (3) Jonathan Clark, *English Society 1660-1832*, (Cam-

bridge, 2000)

- (4) バターフィールドの著作について、次の文献を参照。バターフィールド『ウイック史観批判』(未來社、一九六七年)。この著作において名指しされているのは、アクトンだけであるが、批判の対象は、ガーディナー、スタップズ、そしてトレヴェリアンに向けられていると受けとめられた。ジョン・ケニヨン、今井宏・大久保桂子訳『近代イギリスの歴史家たちルネサンスから現代へ』(ミネルヴァ書房、一九八八年)二八五頁参照。
- (5) 内乱期の「革命史学の鳥瞰」について、越智武臣『近代英国の起源』第一章第三節「革命史学の課題」(ミネルヴァ書房、一九六六年)参照。越智はバターフィールドの著作を「ウイック楽観主義史観の最後の吊鐘」と指摘している。前掲書、一一六頁。
- (6) Lord John Russell, *An Essay on the History of English Government and Constitution* (London, 1823), p.53.
- (7) Russell, *op.cit.*, p.54.
- (8) *Ibid.*, p.55.
- (9) T. B. Macaulay, *The Complete Works of Macaulay* (London, 1898), vol.7, p.40.
- (10) *Ibid.*, vol.7, p.41.
- (11) *Ibid.*, vol.1, p.146.
- (12) *Ibid.*, vol.7, p.54.
- (13) *Ibid.*, vol.7, p.56.

- (14) *Ibid.*, vol.17, p.57.
- (15) *Ibid.*, vol.17, p.58.
- (16) H. Trevor-Roper, Introduction, in B. Macaulay, *History of England* (London, Penguin, 1979), p.16.
- (17) イギリスの政治議論におけるギゾーの著作の影響について、次の文献を参照。G. Varouxakis, *Victorian Political Thought on France and the French* (Wiltshire, 2001)
- また、イギリス内乱史研究におけるギゾーの評価について、次の文献を参照。R.C.リチャードソン、今井宏訳「イギリス革命論争史」(刀水書房、一九七九年)一〇〇—一〇四頁。さらに、具体的なギゾーの影響についてみると、ジェームズ一世時代から始まるガーディナーの内乱史研究は、ギゾーの研究がチャールズ一世時代から筆を起していることへの批判が背景にあったとされる。G.ポグーチ、林健太郎・林孝子訳「十九世紀の歴史と歴史家たち下」(筑摩書房、一九七一年)八一頁参照。
- (18) トレヴァアーローパーは、イギリスのホイッグ解釈との区別をしながらも、ギゾーを「ホイッグ」といえる歴史家として評している。H. Trevor-Roper, *op. cit.*, p.7.
- (19) リチャードソン、前掲書、一〇一頁。
- (20) F. Guizot, *Histoire de la Civilisation en Europe* (Paris, 1985), p.274.
- (21) *Ibid.*, pp.276-278.
- (22) *Ibid.*, p.280.
- (23) F. Guizot, *Histoire de la Révolution D'Angleterre* 1625-1660 (Paris, 1997), pp.686-687.
- (24) 越智は「ガーディナーについて次のように評する。『革命派の子孫であり、革命史家なるがゆえに、不遇の一生に甘んじた彼において、ともかくもわれわれがホイッグ史観と呼ぶあの革命史解釈が完成されたのである。』越智、前掲書、一三三頁。」
- (25) S. R. Gardiner, *History of Great Civil War* (London, 1886), p.9.
- (26) それによって、産業化による物質主義的傾向を批判する英雄という同時代的意義がもたらされたのは、カーライルの場合と同様である。
- (27) S. R. Gardiner, *Oliver Cromwell*, p.318.
- (28) S. R. Gardiner, *History of The Commonwealth of Protector*, vol.3. (London, 1901), p.167.
- (29) *Ibid.*, vol.3, p.168.
- (30) *Ibid.*, p.169.
- (31) 自由党におけるデイセンターの政治的影響力の拡大についての具体的事例は、次の文献を参照。J. P. Parry, *Democracy and Religion: Gladstone and the Liberal Party 1867-1875* (Cambridge, 1986) また、本稿で取り上げたマシュー・アーンルドは「代表作『教養と無秩序』で、かなりの多くの部分を自由党におけるデイセンターの政治的影響の批判に費やしている。」
- (32) ビューリタンとデイセンターの連続性を認めるのは、

ガーデイナーのようにデイセンターに好意的な立場の論者だけでなかった。批判的な立場に立つマシュー・アールドにおいても同様である。「教養と無秩序」における「ヘブライズム」ということは、ピューリタンとデイセンターに共通する性格をあらわしたものである。

(33) *Ibid.*, vol.1, p.37.

(34) T. H. Green, *Lectures on the Principles of Political Obligations and Other Writings* (Cambridge, 1986), p. 227.

(35) *Ibid.*, p.221.

(36) G. H. George, *Puritanism as History and Historiography*, in *Past and Present*, no.41, 1968, p.102.

(37) ファースは、17世紀のウィリアム・クラークの速記録を復刻した。大澤麦・澁谷浩訳『デモクラシーにおける討論の生誕』（聖学院大学出版会、一九九九年）、訳者序論、八一―一頁参照。

(38) 当時のイギリスの自由主義者における対外進出観について、A・J・P・テイラー、真壁広道訳『トラブル・メーカーズ』（法政大学出版局、二〇〇二年）参照。

(39) 十七世紀のイングランド共和国における「帝国」意識に関心を持つ研究が現在、増えているが、実は、十九世紀のホイッグ史観が投射した帝国像を見ている可能性について留意すべきであろう。

(40) ホイッグ史観に批判的な立場をとる現在の「シウィック・ヒューマニズム」研究は、ギゾー同様、世俗的共和主

義を強調する。ポーコックは、『マキアヴェリアン・モメント』において、当時のピューリタニズムを政治的闘争のイデオロギー中心に理解している。彼が当時の「聖徒」を解釈するのに、伝統的なピューリタン研究とは一線を画し、主としてM・ウォルツァーの著作に依拠したことにそのことは表れている。スキナーの唱える「ネオ・ローマン主義」は、従来のホイッグ史観との接点をほとんど持たない共和主義研究の方法的反省に立つものではないか。J. G. A. Pocock, *Machiavellian Moment* (Princeton, 1966); Q. Skinner, *Liberty before Liberalism* (Cambridge, 1998) 参照。

(41) 伝統主義とホイッグ史観は、二律背反ではなく、たとえばラッセルのように伝統的國家体制と党派的ホイッグを協調可能なものとみる政治的立場も存在する。両者の線引きは難しいものがあるが、本稿ではプロテスタント・自由・進歩を基本にした歴史解釈とは距離を置く論者を取り上げている。

(42) マシュー・アールドにおけるデモクラシーに関する政治議論については、次の拙稿を参照。「マシュー・アールドにおける教養と國民統合」『政治研究』四九号、二〇〇二年

(43) マシューのミルトン論を文学的側面から評したものと、次の文献を参照。

黒田健二郎『ミルトン批評史研究』（風間書房、一九七〇年）一六七―一九三頁。

- (44) M. Arnold, *The Complete Prose Works of Matthew Arnold* (Michigan, 1962), vol.11, p.328
- (45) *Ibid.*, vol.11, p.32
- (46) *Ibid.*, vol.11, p.330.
- (47) *Ibid.*, vol.5, pp.237-238.
- (48) *Ibid.*, vol.8, pp.167-168.
- (49) *Ibid.*, vol.8, p.177.
- (50) W. Bagehot, *The Collected Works of Walter Bagehot* (London, 1974), vol.2, p.129.
- (51) *Ibid.*, p.130.
- (52) *Ibid.*, p.131.
- (53) *Ibid.*, p.132.
- (54) ハティンソンの人物像はついで、次の文献を参照。J. Sparrow, *Pattison and the Idea of a University* (Cambridge, 1965); N. Annan, *The Dons* (London, 1999)
- (55) M. Pattison, *John Milton* (London, 1860), pp.116-117.
- (56) *Ibid.*, p.118.
- (57) *Ibid.*, p.65.
- (58) *Ibid.*, p.64.
- (59) *Ibid.*, p.66.
- (60) M. Pattison, *Memoirs* (London, 1885), p.332.
- (61) それを二〇世紀において、典型的かつ直截的におこなったのが、政治哲学者ウォルツァーであった。彼は、最初の代表作『聖徒の革命』(*The Revolution of Saints*, 1965)で政治的不服従の系譜をピューリタンに求めて

いった。彼のピューリタン像は、カルヴァン主義の政治的イデオロギーを強調し、イギリスのピューリタンにそれを適用している。ここでは国家権力に反抗し、理想的社会の建設をめぐる聖徒が描かれている。

(2) Q. Skinner, John Milton and the Politics and Slavery in G. Parry and J. Raymond eds, *Milton and The Term of Liberty* (London, 2002)